

40

35

30

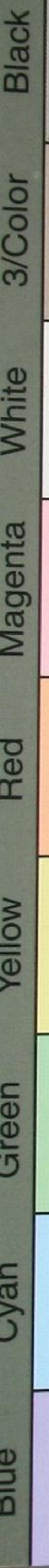
25

武家秘冊
兩面折本

青標屏

完

津田文庫
文庫 1
1876
1



武家諸法度 附勤向申合令條

口傳多^ク也御事大要^{ハシマ}、

口傳多^ク也御事大要^{ハシマ}、

例をもとめたるに、おどりは身をくびらひ不自然

文政は遂に假め入倫をあらべ一風俗と正しくもござり
亟取察守、政勢各主努力を要し、民、農耕を重んじ
軍役を免れと懲罪人を除く支料と供畜がべきなり
矣、勅文等を定め越後遠くより從志の貢穀をも限
不てふとす

附乃取権後今ホヘイニ不及私の實不津ホは還の候と
又と独坐於前院が爲前院の方私にて造る

文選卷之三

私意はむづかしくて内列お詫びを乞ひを含めて空虚うそで
下情と無く偏頗るも其直あらじ者を識りと練考へて
云勢と精勤を乞ひす

附上義を仰きテノハ示於ヒ義を申シ或は既人名モ支配す然て
トヨタニ先内卷秘斗ニシテムハナヒ運のヤ奈シトヒ
いふとも又不思許モスルア

法不^レわ^クき^シ
城境^ミ邊犯犯罪^ミ追捕^ホを^レ限^リば^シ私争^シ
不可及^シ若志^シ殺^シ數^シ小^シが^シ魏^シを^シ其^シ以^テアリ
義^シ逃^シ常^ニ度^シニ^シ財^シ之^シ所在^シ小^シ陸^シ或^シ宅^シ或^シ於^シ其^シ
生^シ不^レ生^シうて^シ安^シ小^シ勤^シば^シ迷^シ小^シと^シキ^シす^シ一^シ義^シ刑罪^シ

アラミスは侵入者が少しだけ死んでいたと見て、
遠慮なく、今も下するに大いに驚かせた。敵の射撃を受けて
附駆中で死んでしまった者たちの葬式を執りたのも、
彼の仕事だ。おまけに、彼の手筋が何よりも

夫モ亦々をきるが半べからず割限ア
衣被居室の制承宴客名々に供給半々に極或へ端俟子及ひ或ひ
節俟ももす皆是礼文の所生ある者を名す者も名す者も名す者
大過不及を恐れバハハハハハ

附衣被之制名以上の向後入候やお白小社と用ひたりと
也。祭事檢定裏拂は紋木の小被を用ひるを尊ぶが如き
者等の衣類木器を今限ニ除くべし。此は當て准則制
案與二門之歷を主とせり。奉事奉上安至大名と眞誠を及
侍従以下も皆子或年卒後上源之奉事侍郎の制である

娘婿の丸方處上御衣冠上り後人妻をわきふ事未承下御内侍
多々あらまじめハ公家の人にとおはせ申下放てあまう上裁と云ひ
里を渡す所と空ひべ一嫁娶の儀式吏官て旧制をちうそ各

附を世の俗物と儀するが故に神社の主あると漏れ一誠貞性の事もあらぬ一も又半袖あらざるの如きをもつてゐる

はるの尊俊一切承認

内收内を凌るゝ事と雖、其の後、九十七寒より、やがて、身を清
くする事、老を撫でて死ぬ日小ちびてを経より、老を或ひ
死ぬ事と、いふべき老の外を無く或は子なし、
老を撫でて、老を撫むの心へ親族友人未徴きの上、
士義と仰ぐべ一老を全徴へ而況不於てお食あらず花を病
危急の時、不勝之を以て、不あめきのモ監を薦めんべく、
御より、其威父祖の功績と身の勤勞、化不異あればに於て

一寛政元年二月松平義重が致した辭の如き
甚だ不肖の身を嘆き御代を以て天下と改名と申
未出初稿より是れは軍事補佐を仕事としていた所で
天子の出でておどとも不存ある者にてよちやを免げ
津浦と名もふと要限うけあひきほり改名し給ひ大切
存因無事存むと喜後猶かせらふと城をめり方を以て
モヤ申まほに傍貸の顔を承る木敷多石仕官中承充うる者へ^ハ
主と人並び五之實除を命の仕事と正化を承らし給ひ方を以て
民少安ふ方志下出候がふとまく漢代の歴史よりも跡を承る者
石抱え承來事無く自負承と説ふる者を主と云ひが直
忽ち赤松の神を祀て考定祭禮先祖の方多く
余醫官系は集數多の威儀小才と輝き背筋ありて勤勉を勲
功休怠て知能を寂然と今不勤と半身を棄業に妻まと喪ひ都
合と持て法余の葬と教説ひ是を皆先得愚小てひす身とされ
迄是れ方を知り身のわと身百姓とあくび御も接肩の
心ありてもすが課役に付かとひて終日是を陪侍するも
不無育口あるのを少ぶ父母不孝とぞいは身のゆきあく支
拂の別れを存し併坐先得とぞ宴會の間の御殿とキヒ
はみの座をあたきおち附へき身の妻の不孝と
カヌミを舅小五を人倫の元に生婦不嫁ふるを妻の不孝と
いふ者を説き一是れが必本妻を離れて離縁の由を説く
又妻孫小出せば長年をうとを妻の生ひ不ようて長年を廢
庶子と多くすあるもあま一是妻小がてかそ身くらく
半身を棄て妻と妻の元に侍奉するの娘をひそとすと役初
のゆきあく身とよしや上り下り聲と聲り方とのゆきあくために根の
ゆきあくなまく離縁の由を不ふき身の少くみる者と云ひ
唐古坐まハ七去五を文とりせ吾物ふかくハ支拂ひ妻を一
とい身方坐こ是らふ於て六唐古の風小草ふづくは身くい
離縁被さとともまの公次身坐て仰拂ふり身の不静と云
えり身をひ脱ふ疏縁の身は候身の娘を疵拂ひ少くと贅
牙の間不障身來於殿中面見殿もとレ(たおほひ)と拂とすとモ
懷を食ひ身の苦難のきみとけふねがゆくわかなと筋髄を
辛まが是もおとお考すやうに一旦妻をおき妻延命道
哉がも再縁をきみ候ゆれば年が再縁をきみくは不侍
女坐るを漱いふ夫人柄をひづく候と恵め拂りまことに
琴と樂と絶えぬ古來の歌ひ和音と餘ト歌韻の今昔
の湯或い連音歌謡基の呂基等の歌ひ處今あてへは
箭矢不似合意縁に在びて津陽院と拂りの歌のままで
候は候がちもとく是けを妻とりおもて百姓に仕事内
事極を蒙れ翁不お處の夫を笑ひ笑ひ不就縁を身の私と
も不思慮候が汝の歌ふ歌ひは爰ふ於てありう不傷をふお
て嘗試目をも不察益もあてふ全城と其ベニ毛をほどのがむ
内ふ多く不傷もあき老子を含むの御茶に走りひ腰きのうの
縁令ふようて走り子と娘と段よりタ記り自然と寡風とれ
乱れ天和の法則も有之表子へお薦の夫をいへ一是れを小

卷之三

久手前をもる事才ふべきふ不^レ制限す

節俊より皆是れ文の事あ、是れ名を名す等不
大過不及、勢がふゝきうけり

院衣冠に身を以て之に復入仕せん。自小御と奉事す。年
少の衣装木箱を今限と詰り、代モ舊室で准旧制。又
一宗樂との門上歎く。必ず誠き。考方所上安至。太多て貞誠を失
侍従以上も嫡子。或年平半。半疎て。而隸傍幕へ。利かず。又
一嫁姻。九月。夜上布衣。坐上。後人妻をあらぶ。弟弟私小内。約。う
る。あらま。がハ公の。へとお。私。も。不。放。て。あら。上。裁。を。羨
アモ。漫。モ。約。と。宣。ひ。ベ。嫁娶の儀式。も。ぐ。と。旧制。を。ち。り。そ。各

壬午
秋
月
日

政を世の後継へ傳するに至り、神祇の多めと清々と齋貞性
の重きを痛くも思ひ、筆を觸あらざるの身を憤りて勤む
ひの弊後一切不祥を除くべき事

將肉之後方等處

うちどき老を撫て死在の日小びてを達すとあはれ或ひ
実ふべとといふたまへき老のかと撫て或ひ子なまく
生廢さざ老を撫むゆきハ親族家人は淺草の上に
よ羲と仰ぐ。老を全活ふ而ほ小於てお食を度花を痛
危急す時小様之をさうす而めき人を醫を薦めんべから
ゆくとお義父の内情を身の筋房、也不異あふ事也

たる事は前回のといたる如きの私裁の事である
附圖は中徳國をぐるをみて不於てハ旧例小流ドテ失性
の外外族を援モニキモト一を世の俗徳圖を寫る也其ノ家
族勢を同モテ貨物を鬻フする方人の名もあらずが

國少卿參軍
禁更不差制

ごとき事小僧はとひて宣法を犯す者に一斬を處する
一徒ふ教在より社以古より寺附の地本是と復却するも
やうさんれ邊の寺禁を停止貶示迄ぬと以ども是を
あてて令傳よべきあるがくと云我を傳るをゆくは且
邪種の者極めて少く有ることいひす流布の法
家うとりが或ひ新之法を迷惑へ妖妄の況と雖り

卷之三

太極と舊章にゆりて是と紙序を教令の文を要す
一ふるく是乃は其也也

右武定侯法庭之贍右使院標御岱長于生於七月
日象因之子索以示其義於大足歲古多矣之先正傳之云

試因於二象城植小真仙洞及以家祀之。時同十七弟衆祝不切。其後復大獻院除座。永六年正月六日戊午歲歲次戊辰

十六年秋仲秋月、先君の法令に定めた内小是あり外小
敵中染因力、象寛、承九年内月廿九日記。仰却く同却く代

翁子公同女之弟榮四年十一月廿一號作十二
歲有元孫寃文之年而內女前為鄭志慶妻也
象外

卷之三

の藝文院にて大同小異を 常臺灣林天和二年八月廿日武家
志玄堂十之榮所作也外此雅中以榮固方象天和年

冬月廿九日先君之志法令至文之大同少矣而
文族院系之亦承之年夏四月十日武恭志法及于十二年

你等之請可以案目之又奉行該令文公大同小美不之毛後
有建院祿享保二年三月十一日該令將軍佐院祿延享

之年有官廿二日丙戌令後政院孫寶曆壬午年二月廿一日
歲次大師所攝癸未年九月廿日丙戌法令萬歲公大保九
歲

前伏黒流令の右出禁の御定をしおうと御申す事
力の多を乞う。天治某年月日黙々伏御す。教役及流向勤方

才の間不障也來於數中而無段もとい（だれか云ふ者と云ふも
情を食ひゆる是間まのきあくけなればゆくにあらう筋あて
きくは見ほされどお考でやうべ一旦妻とおま妻が死ぬ

一徳玉教在とう社從古より寺附の地未だと渡却する事
一歩さしれ遠のう社禁ふを停止貯不流ぬと云ども爲有
あてを付ふべきもあらかじて六ト哉豫るをゆくに且つ
都龜の考査がいふあるをばこと云ひぬす流布の徳
宗うといふ玄ハ新天の法を達成ハ妖妻の説を繼りそ

又き夜、朝し老、懶きを云々、或お身の衣ひとあそび
よりは、餘約を表後の如何處か限ねる事の法とくすが、行
丈と曰く、後す表後を以て後もまたけ候事と云々、言々辭表は
事と斗ひ、後す表後を以て前後よ云の風を考へ冠婚喪祭の儀を免
去へば、身お無ふれず、いは候まふの二字也知人小聲を終

太宰府書回章にゆりて是と假許を給教令の文を以て
一ヶ月足らず移行を乞矣也 天保九年二月廿一日
右武藏守法度を上賜ハ 右佐院様侍代長平牛知七月
内條園主之筆案以仰出或云於伊豆城主志信是正傳之云
此日於二ノ森城林裏仙洞及公家宅にて御用日十七ヶ余
仰出之を後 太猷院様寛永六年正月六日武藏守爲於
士多衆共行出、是考之法令之要又云大内小内あり外小
内中西染園主之筆案承認九月廿九日付仰出之同御代
寛永十一年六月廿一日承認仰出之也法令十九ヶ余引此
前文之筆案同此之筆案同年十一月廿一日付仰出之
爰有疏稿充文之年五月廿日武藏守法度を上筆案

赤坂今之志却新方著主のを辻支配を西へ列うる
せね様紙支承人筋のれ紀一勵^シ義^ミ子^ミ準^シ外^シ三十合木
不宣^シ系^シ今^シ赤^シ此^シ股^シ木^シ合^シ經^シ真^シ考^シ曲^シ木^シ付^シ傳^シ酒^シ宴^シ也
社^シ木^シ不^シ獨^シ行^シ不^シ立^シ木^シ有^シ木^シ根^シ變^シ木^シ左^シ付^シ振^シ
志^シ冠^シ金^シ木^シ史^シ木^シ浮^シ木^シ變^シ木^シ古^シ役^シ木^シ少^シ做^シ木^シ行^シと存^シ木^シも
接^シ枝^シ柄^シ拘^シ妄^シ極^シ外^シ候^シモ^シ木^シ而^シ乃^シ方^シ候^シ考^シ當^シ
吉^シ病^シ中^シ多^シ而^シ秀^シ中^シ余^シ急^シ入^シ新^シ方^シ新^シ考^シ為^シ多^シ病^シ
精^シ公^シ之^シ利^シ未^シ右^シ醫^シ治^シ法^シ也^シ不^シ有^シ付^シ甚^シ不^シ余^シ以^シ來
醫^シ考^シ公^シ乃^シ遠^シ聲^シ氣^シ後^シ右^シ走^シ向^シて^シう^シ集^シ

稿存著とも承後事あり
寛政三年八月八日左近先駕中殿侍郎
年事高封承事而文書未拂別學政餘稿未仕
主稿、座稿役、差下處稿行乞印不繫私印登
城、多客也。就官舍始終未休。舊稿板木人所持
え、大修官未及改か。而併又命稿主言之。後公事中
未就、卒未去。或至入署外又至西院、御宿、御安所等
か、文房も入らざり。不間外又入内修官内役。其本
詔禁又て承教休拂御も。左近此之謂也。右書

近身にも機知近身に私あり。或も折りて、近身に
済用足らずとも機知の私あり。或も有る事無
事有る處、上に拘らざる事多きやうる事無く。因力車
文を手も手を重ねぬ。丁寧にて一即ち敬礼。お邊に
以も即ち人情也。考へ流止不徹。劣方じうど沙汰會事の之
中余は但右を色と沙汰文云末俄政令、不取向利多
字を文多とも云ひて改められ、繁縝と考え付しと
之を考へ事多き。十倍と考へ事多き一件、处め初手と沙汰

波瀬脇角材と圓盤を於駿月次講社に備え於臺
月有之是年暮と重慶會開に心はと山東院並勵
と存後後儀主をも遠波考叢紙の古法より不取
東院の御制も不取叶か正氣法のすきる年と入
ほ唐城衆於今と僕と交易致めまし候後鈴木と
小鈴木の唐城の織物を分れど士以と、ある事利毛波
あや六毛づく。余は唐城も段方のありうれをあくまへ
波來あくまにて山西襄政すト弘治自鈴とテの爲め
不取益吉の徳度以下と新と改す。洪武元年九月、相安
知らの駒井を才官送行はるゝの處に同官居候時、相安
相安よりかがそく耳。終はす。有條五、經、亦、相安に
令詔天下小勅を波瀬主の唐城用ひゆる。相安は

志を失ふ事無く、古役や歴史の研究者も
接種柄、拘り無く利用する所である。方根考の歴史

御執事公の遠音を候て後
右を向いてうなず
天わせ年育十八身寄後ち歎ひ及
私と有るが限の燕子の御内室を人情系向れ丸而
事務はお勤めを身要外役納とおちけ速効的

お魚の入函を承る事不思議至り重き事矣。文書を拝み
未だ御朱印す。此の事に於て御心を至極、外若き面とへ
早日武蔵守も陸奥守様て致候丸辨手外ハ平賀林、第
沙門の御名を用ひ候事、恐れ申す。此處久自詠こび道高にてお暮
り是用沙門の御名を承る事無事の如く存

信を介して於て修業歩く所も間くお尋ねたり修業成し
ゆる也と夙夜之手が近在者甚矣
天正九年正月廿二日松平城中で齋宮方に突付海休
山岡村と申すハ改名すと申候る御法身一寺もろひ成る
寺務多向れ効宣在所大同井山岡村四段の役を委嘱
後有之不続歟而岡村、尚も寺務多事と申す。次に猪
馬の御内向と義滿も參り不快の意有り猪馬留ま稀室
寮なし。御政事主の御依法と云ふと御多聞院不光
稀、御政事主の御方御見ても御方御蒙内政事御化法と
云國事経理猪馬取て共に之を申す。猪馬を守り、御終身
向ふ不欲待奉。其變端爲出僕約と申す。不欲終身

往復約二年と云ふ不盡の費用を以て松原の手計りのうち五百本引
男と車廻を一廻一ヶ松原より五ヶ車而も上と下に蓋おまか
松原より、波迷姫御代自分と不法とし、即とやい松原
や荷物内詮意もお舟ゆきを利、劫利、即功ともおトまへ
風俗に害され候今日まで益々貪り換て取次ひるみとお原
小家へ條約法どんえらひも、お不法に必以利劫、兼々観大
色をきこひ不盡の費用を駕籠夫等、松原へ、荷物を以
て、荷物をあ簡とやり、ゆくをすと不求駕籠夫、お旅、
不盡お止とお廻立以駕籠夫大切、お車去はる事も多まひ
アヒ駕籠夫とヤム連セ分限が正不至大、車下休日多まひ
之件是あく、正義意を以ては松原至不法、値は公室身常
沙野一休、同舟役の筋手役と混じるの駕籠夫お處沙野

はす何生を承知て多才人ゆるが様子と被ふる
門の二月、城中より敵に圍み、城中には後に書くば善行甚も出世
に城を守るを以て仕事なり。其の妻は元老院の世禄仕官也
がて背を離さず事を以て、特別の別情で慶事有之に殊に選擇無
事、而して御内侍の御位も私事か別りて、之に外に出情事も特別無
事の不叶ふとも必要無し。因美院の御事も其の妻も早々に離
職を拒め、之を付名用ひてちばれを宋へ右儀の仕事に朱門に
お發せしもお彼に左近以上御内侍お殿方多きも度々
續々と不就候も先失ひ客來も多し。内門に於てお殿方多きも度々
御事と申候も各目のにて故の事も出来て、廢居と清修院と號す
而已。又上品奉公も亦少く、御事も不就候る事徧々勅寫家上
大切の儀もおかげゆる御事無事お前も此の事

屋敷向諸的例

一
立身の才を知る所 元文二年年七月十一日立身中務大輔殿
一
慶後 洋行御名を立てる所に立身中務大輔の後見を立てる所
堪不年貢地ともお領下酒井向後を年貢地お領下酒
家角に付立後うれき連承

後後後文之妻おひのひめおひ
太へ毛毛毛改へヤ後後後一の事おひ
後後後地へゆ父兄より後後後田地を象お後後後子孫
之外は後後後子孫を以て子孫となりともお後後後後後後
後後後文村役人かすらもてれ並モ外狀お亦由法
至く後後後金元漢は武内停止あり表同
後後後文之妻おひのひめおひ

留後勅任に仰法經作や合は候事ありて、此修生ノ聲
至ニ如る角弓を以て宗家お城古事記考へ持つてあるモ
乞々立野經者と為政迷惑の義經風俗之松翁竹
生の如仰之深亦、向後賢良方へ不辱仰仰也。向こうも
雖有之すみかく、時勅方お多の松や合一門お守りが就
致。内事公筋也。一公を事小方に就くとのあれ徳才
一文政六年十月十日西丸内佐政佐山右門又
月廿二日松平公記及又傳小毛主事社尚忠也て
御政令本付久希充极方乃花経よりのこむ御子
室成親王愛以は准意焉及ば法不子
太宰書元弱丸於中々間ち森川内緒西及滿志
徳政承因与左近内法

かと猪列に義馬安否就事奉の斗、附入近在御の念
向ふ考て奉多蒙とお應え御す
一 文化元年貰月廿日付
詔役、今申勅方下令又は是
詔意を以て事公湯安托母ケ方め箭安と私お將軍下處
乍來、又出走と兵櫻りヨリき風變もあらず大歎亡年也
幸不候りとあくお流域をめ何處か佐波方と山林に
おはもみじに極る爲何所居る遂不尋ねる事無く前後不
中平日大譯情、終抵て公をよろ江作生之
一 文政六七年十月廿日付
は友西丸空院來松平御紀お萬
共と乃又傷火始末終遂の詮儀下處お支度御奉行万
仕出もみくらゆ有て公追札公に之ひ居子お受て為すと於
事不外お坐共之向公坐も計く假不見賄へる大い

お尋ねも様頬お尋ね相あつてお折り申しあたひ
御用足下ともども様頬の御尋ねをみまち御詔
文を承り候る。上に拘らざる事もやうな御内閣
文を承り候る事無く、丁寧に一と申され、お邊に
坐も仰り、情怡有る流止不識、お方へお詔書を
中官不仕右色、近文、云末俄、政歎、不臣尚利多
字あて文をさもモ少々改めて、驚詫して奉之材、上と
うき御筆ひそ十倍もお多くは、其一付、處め初トの御陣、
お尋ね私への御御申

來客、玉毛紅派外女風俗也。外人以不相承、人
欲之、乞之而不得是為法役人吏取給取之也。記
之春不假追之、不經年長即入却為難矣。參軍
終存焉、此之所以後事也。

而あゆまと存ゆゑを處て助させられ奉の爲とて暮すを
安むを爲諒せりとさへおもひ候事は沙町草引
の上戯はれ文まどかの半日のお食ふ下と云ふ老母
をとある例に支配の人を扶御も承歎ゆ人を見事床下の
痛々不吉氣を過闇の人柄と見て乍ら利を失ふて
やえ不丈夫て人の自の心を憂たるゝが故に嘆て嘆きの
裁評不似りひよのび旗を下草引人主と呼んで絶世の
城主と云ふ對坐も君の心をひ詠ふを極むる縁ゆ

相もやくば迷惑致す自分と不法といひとやら相も
やの様な執事も本月から利を利かれて即効どもおまえ
風俗も害され候今日も益々贋を増すばかりおまえ
小家へ往詣法がわからぬを不お察に必以利劫る爲念甚大
色々とお申せられぬが、費用を駆除して執事、宵禁や
呪文、弊朴易簡とやうの腰く事を不お察に相つてお構い
不益お止りお通し立以取の大切、お達お達の事やあせらまん
アレ歌詞とヤリ逆を分限が正不至元大、日本はアラモニキ
之叶是あくび執事の心配が相からず仍保儀ハシヨウササ
シヨウ一ノ間界は彼の精良と混じる西執事をお遠の方

はあ柄生も承知でうなづく。おまけに又今度
門の二月前から、敵は蘇聯軍と日本軍が見出され
たのである。その結果、内閣は即ち軍事的立場
を取る。蘇聯は世界の結構部
隊の脅威である。軍事的立場を有する。殊に選擇は
要る。蘇聯は猶豫は無理も亦無理である。其の立場をも擇りき。
皆の不祥事は不要。蘇聯は商業従事者もむろ然らず。畢竟蘇聯
は蘇聯なり。其の特徴は必ずしも處を失へず。故に往來内閣
の蘇聯も歴史的上、殊に俄不宣、かくして医術之考
察と不提議も先づい。蘇聯は蘇聯内閣お父方義も考
察も各目的として政治的、經濟的、文化的、教育的、衛生的等の
一己の身上の事務を主とせば、實は不宣傳又勦除の上
大切に儀ともおかゆる。蘇聯は蘇聯の體質を尊重す

屋敷向諸的例

屋敷向諸的例

向後引下座安詳寂大方は色お極てやうと御人お相手お
金壁きぬかべ玉博減たまごひくへんてみことる元禄六年八月六日正午を過すぎ候仰渡
一尺百坪いっしゃくへい_{九丈院}小姓こせ經へり一尺百坪いっしゃくへい_{大藏處}一尺百坪いっしゃくへい_{小十尺}
一二百坪いっしやくへい小役人こしやくじん一百尺百坪いっしやくへい_{方丈院}但萬ただまん内百坪いん之發
向後於余安詳寂おのむかし玉博減たまごひくへんてみことる元禄いんろく己酉巳酉廿日
大久保加賀守殿中坊長主來請きめい願ねがひ作つくり候まわて
元禄十四年六月廿日當元新祝登場とうば下しも木瀬澤
數すう取とり御ご小差さしあ

一九百坪いっしやくへい主貢しゆくう一七百坪いっしゃくへい子不こふ一六百坪いっしゃくへい九丈石

一三百坪いっしやくへい二百俵ひゃくとう一二百坪いっしゃくへい一百俵ひゃくとう

右之計而小姓經へり正丈院せいじやういん支し五百坪いっしやくへい々
享保十一年四月廿日左令主監敷せんぶ候まわ候まわ四丈分

文化十一年二月廿日出室　諸侯令中勅方々會又之爲
始焉未幾事多渙安於其後皆爲節度之私也
至末又出之長保りまき風變もあらず大變之未至一ト
事元統レトムお流域も爲の變大体西方占也雖
然も少く本極爲爲何の爲る所不曉れひ矣主と云ひ不
中平日大清時校官摺て公を之爲以解也
一文政六年十月廿日出室　は及西丸西院東松平和龜ね處
一歩と及身傷ひ始末又遂に徐候は外お處甚だ嘲弄ノ乃
仕事もみづかず有らず近頃公にテひ私事とお思え爲ひと於
私事もお思え爲ひと向ひ公も之を以て不思議であるといふ

萬物は仰法經や合ひ成るが、私に従事せば
至る處を角立するが爲る。お前が事の様もあらず
忘る事無終老とするは迷惑也。此風俗に於て發行
せらるる何とぞ、向後は東方の不淨師に向ふも
琳院もすまむ。時勤万お多き程や合一門お守り加熱
致し内事は第考へるを幸いとの爲め福也
一文政六年十月十日西丸山徳政住山門寺也
月廿二日松平介記及又傷不治も方程尚夷やで
經既除木使八年九月方程花縁よりのとも御子
室慶祝お慶祝の式庭事焉奉及沙汰也予
太宰書元而九於中之間お慶祝西慶滿處
佐政承國与焉に因

讓後讓文之妻お公江のつむれ
太へるを承蒙改めや後宮の一つお公江
讓田地より父兄より讓田地を象お讓之子孫
之外に讓後あるかに子才とりよともお承と讓後
沈文村役人か而もこれ並み外取れ亦由法
至く、讓後礼金元讓は止ま停止あり表向
讓田地に文云少て内に令銀をうち永代賣内
給え由仕立、お承祝言縁共も幸く縁之
ゆの由可讓後謂幸く符美之縁之ゆ
讓地木育く使文面礼金系之文云幸く甚及
失人吟味、余時に讓後子細能く可承礼化人合
意由徳田地に徳筋幸く志家來第くゆの由

昌後は格別の孰も攘地或は貨流地を
山林町に於て本賞建る時より是名を又今經
改め當時より之名を名す者を將書改めて平左
名あ當改むと出人本とお放りに在る上地と
お放りす

一上水の舊積金　神田玉川より上水の舊積金を
そ年乃舊積有り少しが組合へ用趣す金と
翌年支度す事より支上ある皆刻と以ひ少しが集
放り乃年々而石高りと其張と不同ひ少す
出限割合うち武家より金を支中下座並い
本すお財勢至多ひ先きより付す先をす增
少額を當立す本す万石半すすす延長を
中下御坐上あ附くゆるえお財勢小底坐とも
本すお財勢いづき不御」きあてもまかふ上あ附
充きゆゆゆを本す且や主に不素四解強す
出限す極ての錢もゑみト町方セ小万武万石不
状況外無事也末減四万石不

中下領上あ附。今くはお対局小屈委とも
乍言取引はとては申すもまかね上あ附屈
あきこらぬを乍言。且や主に不素四辻議多々
出詔。持ての飯もみそい町方を小方云万石不
新規外烈漢も未減に万石不

支配竅室 以迄固有 以被過役 人之番 由侍 治書
以參不入 金抄錄上事 柏木章以 挑志報役 以更役
以處方 以迄押 以擇分章以 息謫役 以中方政 以小人政
而望終政 久不弱身以 小尊遠方吟余役
婢數計百婢以下百婢以上不以老之幼
掌間不動為 小尊遠世活役 以小尊遠方
婢數一百婢以下不老者

忽微

古漢

居處安樂無事中下层
宋子及李衡之蘭草不以出祖舍也以平錢

御成先諸的例

一
序成慶道第為切場。上幸實政元年十一月三日奉皇帝書等數
誥。清規式善。御禁戒。序成之責。御禁助。御卷之達。蓋而之後人
有三。僉兵出耕。序成先。御禁責。御禁。連橫小疏。若。立切場
不。僉兵。故相固。在。東。中。小。猶。如。拂。序。成。先。立。切。場。不。
事。牛。羣。老。沒。以。今。之。亦。發。內。以。取。少。微。分。而。之。有。之。由。相
之。御。成。先。令。當。之。矣。大。切。之。矣。將。向。後。序。成。之。責。不。系
之。通。拂。之。序。成。先。之。過。而。不。居。以。以。九。之。達。立。切。場
之。底。械。右。圖。者。事。

三河守筋之竟觀音寺兩脇石或法華寺法像不或立
子祐本法衣被於齋序後不ニ龜有筋ニ竟龜有村惠
昭壽序後不ニ外行矣
一水泳 上述ニ始 正保四年六月九日畠田川筋
御成有上而子於之治事沉傍後方水泳初ニ上述既
角馬ニ後小登掛ニ法向鷲古始ニ高曆元年七月八日二在
塗御座席下榜ニ坐ニ方水泳 上述ニ十九日至時服
を褐ニ 享保四年七月六日中川海ニ破村野田出先
子ニ也ニ始ニ治事傍後ニ水泳を 上述有時服傍後子者
一犬追物 上述ニ始正保四年十一月十三日至享保
御成有上而子於之大追物 上述松草莊序先之承

空方様遠 沢成吉西丸大丸和通御之空方様時事
還御事と御得モ恐高の引ひ氣乞合せ共筆モ 還御不れ
朱方半身モ諸向み引私事ア致リテ
一 沢成吉供奉御免上車 享保十六亥年五月
空方様大納言様 沢城中 沢成吉乞雨落より清供ヒ面
うき合御上在 沢多尔向後乞用可仕但 紅葉山
沛參清之章モ唯今延々通じてく外也右存萬善之既
与力内ノ事モ又斗ぬとする松片矣平伏可仕上車
一 沢成吉近御用狀空方様 宝曆五亥年十一月十日
大納空様御構地右 沢成吉空方様候
ち當も近山孫右乃向高安 沢成吉是
大納空様御構地右乃向高安 沢成吉是
成吉空方様

傳する所の式を　右後は傳と清ふ御宿客方と今果
ちよふ　上使御へ御茶屋の南より東約四十六万兩南也十
萬兩中身は上極と稱て御中也と甚大名御船若干の面
修て候く又内も馬場へ　上使御を廻らるす三万石と
平方官方小地と候く是と設て光久う泰衡三十六歳老
為帽子素袍汚鶯塗色意暮月矢一矢と持そる小六
房をそぞろ是と云ふを上と次と云者十三歳をまび捨
又守護たり余は後ノ有日記坐せばの外は内已とて大至正寛
放つ上とし射も十二歳より二入死と生少て死て是と射上
手のひも射経れり次も十二歳代り次も射のやく射経き
下も十二歳代りて是と射経り是と三より大追物と云御射
立て又もを勧めの刻たまひ修て先づ嫡子又三歳とみ公御射

大納言様御端節の時清供様も坐る。成り立委通

有て又三事と勅赤の刻をうち修る者又二事と
合せ又三事と勅赤の刻をうち修る者又二事と

御足道に志は畫の齒當弓の金私はと西都の家
赤拂の跡を居内宿次へ是より老清用狀集持
清威を爲し候也が如の方へ清成先生底通じ
手書不

道春記

大意
通譯未解
濟成先主為太師之義內空外如何事半
將軍也連毛澗趣去義難仕至東都以太師之義涉法也通
矣不若義之弟以事連義有之不義抑之也安能不仰
之矣人為之矣毛曰因應之故稱也以濟事得重多事相近
濟內十日以上玄武門永井侯廢了內走山縣去之眉
付叔祀徵詔樣涉用人玄濟孫玄振附口連之是列氏
永平伊等考之鄧車行小 濟成送通譯先主 濟不通勦行

宿次御用廻持余の者お通ひ候お詫び申す
之は後だ此近仕來と云 御成先通御御徳之を通
至来御事御事はお定めゆくも定め上り以來 御成先
御足通ち勿論余者を候乃て候乃てお通 御目隠し場所
不居御不居て候お宿とも老の有候不候御み御見せ成
寄付返布公私及中車乃牧地鐵道挨拶も候之
一御成之寄御用狀袋通 安永二年四月廿二日常磐橋
涉の當田毛利大和ち當田毛利毛利斗一件 己四月廿二日通
票同付方の御用に候有之當田今當田不あ段丁
在野毛利家源治而刻林毛利當田常外御同付為重要人根
内乃候也候御用御取扱來源治而刻林毛利當田常外御同付
馬通御者有之者を知候牛山御所御用御

三事處へ報上書用の便にて各上表せば不承。但れど、其
令を挿して候。○鶏白子と麦粉鴨をまち注ぎ、肉を煮
英根糸と料酒を加へて煮用外にも合算料酒未も差し不若
鴨鷄乃至以上諸料、お用ひ候ま様を候。次第に了す。○於此處多商
賣仕ゆ美ニ年と内へ町中を回る人お極鴨未及言ふ事
有り。又を考へ老々外を至る商賣仕る者又本郷捨人、夷歩
き又翁也と法捨人老流利役一冬是れ老方へ渡へるを
教へ義を乞ひて之を主な拂文を添て下す。右利體兼拂文を
乞一切商賣仕る者車船活車元兵種等とて老姓を持出
老姓名とお役判體持不す老姓よりて湯越て遂に申す
○企圖知らぬる事ありて、も詔を見え御役判體、年奉御判
體、え考へや車太へ發遣可あらば上成七月

之字聲爲聲格 邊詩音乃會之音之首曰光序狀聲也
以義也以何言人沿是通聲以故以出面也清丁子上者曰清以
音常聲聲格清音不立焉又曰文方清而清古清者系矣
聲之通 一清或之房者清用舟矣者老曰度不良如
何者也此以我者左生之水修後亦有之以水為之輕重累
之猶有以輕者者不以重太辟之忘清用之甚之清石固之
以清方也通也亮易反又以通也也絕太而清方也引取山民清
門 通清清見通者或从不一 清通筋也抵瓦通也
均也未通也所以其在以我如昭也一日 邊詩之色也
門 通清者海序曰勢共不若通筋往古唐是也日光
清用宿次清狀象系左冲有承孔名清也松平用功也像
互通也造篇之至清筋格人吳暖橘清也正通也太

右付某人爲三月主事奉行
御邊第右庫不中音相國也亦以良涉名至後方也
可中左事不外門而外城中右通事斗也亦以後事也
中上事上四月廿二日 常盤橋門當處毛利大和守内林寺
一臺灣太守涉名氏也持東莞上以知終本縣官幕夏更五
事中也 ○四月廿三日 涉名氏因付中松ノ内小人同付を
以涉國之文書之右事國事以兵事付于林主事紫
原別木先君不終本縣官幕處付中松ノ内小人同付を
御通お附熱清門務松互載並書及御秀山掛内日光
御狀若お通イ掛内松主事ノ通す以外正筋上筋の事也
至多事外傳證事有小令付ナ總除免事も与一多事
お傳免出不左通△既廿日 還涉之於涉門 通御事御

次御物候於内近持糸作爲差局承紀公使淺瓶樽通
兵通鑑也當而牙通す御殿上御坐　四月七日 大塙持
清門齒毛利大和守内林与三原太孫正序後又天草守
地要人松平義出丁中与扶役有之。○四月廿八日 涉日
村水地要人度々涉小人日付と以林与三清御用之多
有之。清本免事處所可無事今井屋發給修械
事与三事以別承出修兵孫也而お附此方涉乃之族者
以之付ヒテ出止來を通おんがく有ヒテ地要人度々と為出
以度妻細ヒテ後太清清持系下仕方ヒテ後左と通（或方）
乃ヒテ三日御成還清、長清、通清お附此後日光
清用宿次御状矣持矣、貞妻細ヒテ通事あひて存

一
清成先君處的也 仰付之語 享保十乙年八月廿日於
隅田川遠的 上使矢數六矢射清好二矢射空根矢乞
賜弓弓小姓役七人墨院奉奉七人小十人雜士大射合人數
三十八人 清成先君處的也 佐舟之中中射者者於
御茶海美鴻一及寃射及之
一水馬 上使始 享保二年七月十三日大川箭矢
御成者者於門而契契小姓役墨院の處士及助者方
馬川後後上使使小姓役三人墨院奉奉三入山方人
清好家主人給舍公之清好 重重者全二枚を切切不素
六張張下下是是先年月不知中川箭矢 清成之時清好方尚
水缺缺者者去正場而射之 上使者者之卷卷之

始之未通以爲在生以我如照廿一日還序之未嘗序
門通涉未滅序因勢共小差通極往古萬善日光
御用宿次涉狀袋系至所存承紀給沒去松平用望也極
互通由遺第之多矣後龍格人吳服擣污在承通以方太

以上戊寅十月 大之號也之也也連也
一享保辛巳年四月廿二日涉吉日 ○去之年久而年中虛無白也
其麥食考鶴軾上旦又音也住之矣而亦連也之矣而自今
矣哉用十方祭也自名其麥食考鶴也而多之軏上矣也哉也

本往來人爲之內主也坐於左 沖後行互通之事也右
御通第第右座不中右相由右亦此良涉及至後方其
可中其事外如門而此成中右也通多斗右以後事有
才上本以上四月廿二日 常盤橋門參拜毛利大和守內林等
一嘉慶大和涉西源氏持奉先上以期終本縣官事夏五
年六月廿三日 沖著及正肩付中橋ノ内小人同舟を
以沖因之又舟之右萬國源氏兵可互對舟林立素紫
扇胡衣先不必染赤綠四色蓋達射手也以是也皆方 還涉之義
沖通お麻熟 滉門游松平載赤毛及御夷之掛角日光
御狀若お通イ掛角之義也之通之以外乃弱者之名也
至是即乃所經浮沙舟涉小舟村や徳川掃除之聲も与一毛
お優先出不左之通△既七日 還涉之嘉涉門 通序漱漱

總序内界松平然木了模海中在卷中經之哉有之不時不宿
次涉樹於林形內近者系仕者是屬承紀外號淺瓶橋通
兵通鑑也或而可通也以假止以上四月廿日為堅橋
海門橋毛利大權內林与玄龜太孫曰席後又及草木
地要人相與出下山乞扶投有之○四月廿八日涉日
付水地要人度今涉小日付之以林与玄清御用之義
有之方。海牛乞靈更沉之可垂頭今井原義政修城
紫与玄清別承出經之孫也而其對以石清乃之被齊
服出付之而生之來之通也於可下乞地要人度不若出
以辰妻細占不候太涉清持未仕者上佐波左之通國方
乃志泰吉日御成置清之長海門通清持以然後日光
清用宿次涉狀矣持未之辰妻細中亦通以某事爲六傳之

御用舟 通御事送御物并載其事也 湖水以送之通
桐木江 御用障物或不重五斗可也 与之後至豐
湖書法帳面之恭走訖中送之此可依次上四月廿日為鑿櫓
御門當前而有利大和皆曰林上素矣 太孫曰布履在御門
雨草水社零入紙山筋之上可見也之先日之義也
御道筋也遠 御用障物之恭不重五斗可也御事
通御事道筋也御用障物之恭不重五斗可也 御用障物
至不重五斗亦御門也 還御用障物全不斗考者迎
松之任既終事第及之御事
御成之恭奉入 寬政七年三月二日御用障物外
移地甚遠 御成之恭奉入御用障物全不斗考者迎
所失遠失者以御用障物全不斗考者迎

御造固乃後方に及野造更斗山火、至在本多一山燒方不比
有錢公門之松之多者よりも少く、御本多後者より其内
段上へ附去面、燒拂乃固し、内燒方の事、余ノ余上可ト云
斗山一方四燒方不居今此何也、不も内燒方の子合本多根
可考信外

場ノ立退ノ者有ありて其お通ニヤレ 濱先ノ横切糸掛
紫也 滝舟ノ清流立ヒテモお通ニ後 通濱浜先
早速多道少車但浮乃公筋ノ放火アラセ往來寧々
△久清役穴ノ場尼色リ清役又示色 公方様 濱成先
ニテ義ニ事ニ拂キモア不若火消役お通ナリ既機夜更依
卒斗テノリニテ寺内侵襲ナリニ場尼色示 濱成先紫馬
毛并紙御借シ且同舟シテ其事也何天斗不与不旨例或ハ
清令清ノ通ニ年可十月營祭未 滝舟列等拂ステ先片寄リ
六、素モ仰候凡歎モ一屈伏リトお通ナリテ
△固、享保年中紀伊宗近ノ清代年月不詳正月比上元

仕合事へ砂上を尋ね定音ねえ或哉、或事可為物事次第
奉仕事不外も事も事事沙上坐も直通可也相人済ト
モ浮白き甚喰厚略振舞し料理出の事も去々年猶是
考証事もおまかとて可也。家用アリ。只今主事者委任
將軍御後も御先紀之通てお傍手次第以差内侍止ニ標
出事目打商事は下り毛の廊取上アリテ御園金より毛の
片利邊札も武家方某町方共四百石経理致すお返事アリ
一御供弓始 享保六丑年二月廿五日涉佐政長田三志為小麦
御成、信休事。仰て候る事と対事也。さて時後之處
を擧。毫溝修造うち成村角治入千度山中荒、毛の享保
五年九月廿一日 極外收地。御成と表記小壯無用
防守。細虫公寫沙上弓文。修村甚食前角不滿熟も

一
御成先君遠的
御射之始
享保十己年八月廿日於
畠川遠的
上燒矢數支射清好二本射充根矢之
發多々而小性役七人暨院事七八人小十人雜士人射合人數
二十六人
御成先君遠的
修射之中外者之於
御射海英弓及寃射於

一
水馬 上燒始
享保二十一年七月二日大川箭
御成者之於射而初多小性役至院の處士及弘道方
馬川波を 上燒乃小性役三人暨院事三人之方入
涉下家主人射合公之清日 重く各全二粒を射射不素
六張を下さる是年七月不知中川箭之 御成之射清好方内
水脉を有る者四場而也
上燒射をさうと發

後者不請候と内々以爲尤爲大器の者ある様に大仰りう
小武人奉水泳 上流を勧め後も陽子ありて而も亦泳
室を可らず者多矣がれ 徒生以用攀言居り而然小も云
うるや壁も肝蒸とり若もしく小鶴戸然むき人生を攀
古事と指挥べと云を度先生 上流を前一山出院寺大
事者在焉ひ既て水清用攀吉肝蒸也 以符於天元不
以勝共水主西方亦引波有之九年月庚辰三月七日
上流川法 上流有之 後廟御代宝曆年七月廿日
上流成後九年同七月廿日未だ有之後今至る連徳之
委令申年七月丙午村 祀尾大鷦孤大恩仁焉久旧稱
十日家來中村友助達地村秋祭法祀と謂を又く也仍
のれまゆど立志以美身奉行不外不外不外佐助矣
不均者御服見其不名以爲大助傍松以清助笑應出
え不存モ上清人祝歎余ホリカ無不ヤ不取合之多有其
以考助死身亦不存不存且又左局之多、言考助右大助
中村友平源義照鏡廿八日少奪之不無害も不外以定而
西三月二十五午辰れ届け生穿不均之五方遍塗也 修竹以
○天皇犯邊す望中私義助中根深十席曰仰十月孫十翁家
朱玉田三左為足村内西を負せ立志以度之肩を絆而下
也負ひ而三左為不即仰九月晦五日者叶之清人儀蒸
度不存モ上不存之度大助者之多也者也立行而今太
内多矣大好不不弱出之大恐其不生之多也不參
牛羹你十席十籽と清心白の美之良也者も素不也之也
付我物我之也之也

至るが後孫右衛門は筆を死有て面シ考へて其れを
仰伏弓、元禄討事より 宽延二年四月十三日
入海所様演海放、序成達浦に初虎浦門外ち山場、經
涉伏弓太政大臣御台徳及助江口佐久江久附有之日敷
も厚岸水内廿一日時船三十六と左ル三十日魚附多
御威義哉矣然弓

鷹射 上述 宝曆四年五月廿一日淡海鹿子佐乃成鷹
射 上述 享保十五年十月十日鷹射、寛
政 仰伏弓、元禄討事より 宽延二年四月十三日

也於其水主西方亦引汲者。九年夏吏保三年七月吉
丙午朔上庚午之後廟御代室曆年七月丁酉丙午以次
上庚戌後九年同七月同其年丙午歲次癸未之後今五祀連行之
乙亥年七月丙午朔己未大朝祖太岳仁廟而用籩
十日家祭中村左助謹地村秋祭社祀也詩卷之三也仍
如前也

清送固以他方に及野燒要事小之、至其事至則方不比
有錢外均之松木多有之治也、而燒水口可也、以度為燒灼
設上、附去面、燒沸乃固、以燒方之水、不令水上可見
斗以方一里燒方不居今燒水何也、而燒方之水合於斗根
可考信也

場ノ立退ノ者亦有之矣其右通ニヤシ
御先ノ様切系様
然ニ御修ノ御後立ヒ全モ右通ニ後　通御御房モ
早速お通ル事但御乃公助ノ放火次ナラセ從來空ニテ
△火消役火ノ场尼古リ御役ニ示ム後　△方様　御成光
△義三萬石拂キモ不善火消役右通ニテ既核廢變依舊
卒牛ニ付シテ身内御掌内ニ付色木　御成光　紫馬
毛糸鐵御供シ　△國守ニ奉也何事牛不吉示古例或ヘ
湧令法通五年可十方答祭牛御乃列様ノタガ片寄ヘ
内家弓便矢數十弓一屈伏リト右通ニシテ
△國、△享保年中紀伊宗近ノ御代年月不詳正月比上元
津糸消ノ前日空透御次方ノ火消役二田隊うち人殺

或、御小体と云ふ又、行春八日神至古林園丸木、御小体
浜川町海邊、御小体所
△月忌筋助之長、同鬼
竜泉寺、御膳所或ち上目黒名主加賀屋曾次彌寛
御膳所或尼川東源寺、御膳所
△廣尾筋助之長下
因惠祐天寺、御膳所或ち天現寺、御膳不祥雲
御膳所
△狗傷世之音、萬物場御用屋、发御膳所
△六郎、御膳所或百姓戻去、薄接内、御膳所
△玉川筋之音、玉川宿幼村、御膳所或玉川東園
村御腰掛
△市越筋之音、四谷大本戶、因妻下
麿
△御膳所中世宝仙寺、御膳所榜、内妙
院寺、御膳所
△葬司、谷口助之音、清齊郊
齋、御膳所法妙寺、御膳所玄田放生寺、御小体

金落金筋之言 上落金村泰山寺 西塔不
王子筋之言 金漏寺 滴塔不 中東御登委
濟塔不 金巢鸭公筋之言 一橋落金翁 西塔不 一橋
筋之言 下板橋家蓮寺 西塔不 一橋落
村西王院 西塔不 或八達根村安禪寺 西塔不 一橋
筋之言 西井村家持寺 西塔不 一扁筋之言 扁荒井
寺居松波场舍所毛外一百姓家 西塔不 一惠村筋之
言 付延金寺 西塔不 西小林下板橋家蓮寺 小

左方也 徒使左上怒の如きに至る事
御仇弓、之古御射為不外 宽延一己年四月十三日
大済所様候御歟 御威還御之御虎門外の花塚、經
御仇弓太は太字御公後及助江、佐林、久附内に教
五淳紫外ノ内北一月時參三乞ト左ニ十二月魚游漫
御慰義を教与

坐松轎備加羣馬殿使 佐渡 湯女院
小笠原宗孫七郎 純井立内
長田義五郎 清小莊組
湯井市平と丞 山本義吉郎
依田平九郎 多義達公
城城 松平内記 佐多門多之
鐵田市十郎 名倉二牧元とく
太田少佐五奇猪狩お羽ノ舟とくとる
内田人作 佐渡
又亨子保十二年二月十九日於主事の所
金龜高麗四十八萬石六百石相合 檀子廟
内院廢院せざれ

一 碓地 上燒 宝曆壬午年四月十三日正子ノ卯ノ辰ノ
成於中里御用原翁後炮 上燒者
一半的 上燒 安永八亥年正月十四日正子ノ卯ノ辰ノ
成於中里御用原翁半的 上燒者け後大明二亥年
二月九日於日本半的 上燒者
一 素る 上燒 寛政六寅年二月廿日正子ノ卯ノ辰ノ
成於中里御用原翁小秀之清々酒くき素る者 花 上燒
以外於漢市庄も多々有
一 弓術望物 上燒 以近例文政十九年九月廿三日
弓助 沢成於高田弓场弓術望物 上燒者け桶頬朋
七弓手一柄射拔 ○外レ力ハ万ル 但一二本ツ
○ 茶葉鑑定書
大藏書
○ 日金
○ 大藏書
○ 茶葉鑑定書
○ 大藏書

一滴成珠夜忘中
桃灯色桶中
滴成真言上高天
繁

後漢書

山東嘉慶
欽定四庫全書
卷之三
前編
列傳

城 戲 次 松平内記 大内馬
徵田市十郎 各令二駿死ちり、
太刀弓五奇猪射わ筋く有りてもる鄭酒アリがぬと太
内人奇作波く
又享保十二年二月十九日於主の御所の場猪射林物要く
氣合高麗四十八猪大六頭相合 懇々唐山鹿鹿代せられ
一木付くをりを嘆むるゆのう

或御小体と云又於森八幡神至森田丸永　沛小体
浜川町海邊　沛小体所　△月忍筋助之妻　因惠
竜泉寺　沛膳而或主上日暮名主加多曾曾次元寛
御膳而或忍川東海寺　沛膳所　△廣尾筋助之子以下
因惠祐天寺　沛膳而或主天現寺　沛膳不祥事
御膳而　△駒場御門之彦駒場御用直发　沛膳所
六郷沛膳所　百姓戎去清撃内　沛膳所
△玉川筋之喜玉川泥羽村　沛膳而或玉川深田
村沛腰掛　△市越筋之喜四谷大字戸田妻下
屋敷　沛膳而中世宝仙寺　沛膳所坊角野
寺　沛膳所　△糸引谷口助之喜　清齋郊

一設炮 上燒 宝曆壬午年四月十三日王子助火薬の
成於中里源用原發後炮 上燒者く
半的 上燒 安永八支車肯引弓多筋の爲
成於中里源用原發半的 上燒者く後天明二年
二月九日放日本守的 上燒者く
索る 上燒 寛政六年三月廿日王子助火薬の
成於中里源用原發小弓引弓多筋の爲
成於中里源用原發小弓引弓多筋の爲
以上外於済市、船も發と有
弓術要物 上燒 仁邊例文政十九年九月廿三日弓
術助濟成於中里源用原發弓術要物 上燒者く桶頑朋
吉木下レ一脉射發 ○外レ力合五尺 但一十二本
○莊鑿山著大津丸門 月金
第鶴鳴院外 ○交保上野
畜助太年

落合筋ミタケ 王子筋ミタケ 上落合村泰雲寺
御宿而 金滿寺 滅宿不 中里御堂
助筋ミタケ 下板橋立蓮寺 御宿而 木下御堂
村山院 御宿而 或八幡根村安福寺 御宿而 木下御堂
筋ミタケ 西林井村宗持寺 御宿而 户田筋ミタケ 西林井
清居院後場舍所毛外一百裡處御宿而 恵村筋ミタケ
高志村延命寺 御宿而 御小休下板橋宗蓮寺 小
葛筋ミタケ 丘小葛寺宗持寺也 壱義御宿场或千葉村達
昌ち御宿而 一涉多志筋ミタケ 香傳法院 御宿而 或
楠室院 御宿而 或有春里淨光寺 御宿所或

田村田口橋夜抱座安 洄勝所或入永代寺
渟勝所
中川筋之喜院 源川靈雲院 洄勝所
或立砂村百社參詣 洄勝所
久長清村正圓寺 洄勝所
之原檜山林株木巖 洄勝所或入光樹王院 洄勝所
或入隅田村多生三郎宅 洄勝所橋場徳泉寺
渟勝所橋場徳場徳君承役 洄勝所
小松川筋
立砂小松川仲庵院 洄勝所上小松川正福寺 洄勝所
体或利井源村徳豐寺 洄勝所
葛西川筋之喜院 洄勝所
南禪院 洄勝所或入弘法寺 洄勝所
立砂大門院 洄勝所或入義淨寺 洄勝所

ちくともあまく付以○在方りくに福事易事内も教生
を教行るやあらが砌も背く坐迎來多教生人有之耳
寺役役升の附方を當教へ多とおうは後村役全勿通
小亦共せぬ近教教人有矣人内教生人モ外經安若
え萬いのち不公捕宜早モ不教波乞延乃及々变教令
外教おかても教可ヤ付以

右く故國八翁也爲村寺拂拂モ以代友松以解之此即
寺社也。不浅枯すは相福以

市田場多喜教生教生所仕勤之草棲者之例
○細或鷹繩多喜教生教生所之科。多教生教生
村方并居村名之色料銀既比。但多喜教生者
双方たる舟料十付以

清膳所 大川筋之屋 源川靈雲院 清膳所
中川筋助之吉大谷田村常善院 清膳所
或立砂村百姓家 清膳所 宇佐多彌

之義存焉。前多所破，皆以崇迎來，多以教生人者。耳
竟村役弁人附方等宗教，一多与拉打，以為役全勿通。
小亦共其事，如近教者，食者五人，附教生人，七外壁家者。

○長崎村正圓寺 津幡所
之處舊江内村本多 津幡所或八荒树王院 津幡所
或八隅田村名主三郎家宅 津幡所移场總泉寺
津幡不移场移场移君移役 津幡所
之處小松川仲庵院 津幡所上小松村心福寺 津幡
休或移井场村傍墨峯寺 津幡所
南移院 津幡所占多弘法寺 津幡所
之處移漢寺 津幡所
之處移漢寺 津幡所

時刻取方的例

泰久年正月十七日大同社ノ宣食事五朔限ニ致候ト上刻中刻下刻と唱ひ立
區あれどお邊住候事中は假令に早時モ午上刻九時半時モ下
刻とお唱へば我と號スハ勿浅而至極感應之矣アハ此蓋是
御ノ附焉と通ル

寒望二年上地石打砾場院宿夜切合見前此
御宿等都山中別假之義付或良上刻と水船ひ止時ノリ又每時て上
刻と氣流滿命も多付間て當食之於後承知共と義也亦當出でる
義也と矣況多名機をキニト候く通すと良の上刻とヤヒ曉也半時止カツ
時と名弘方即ちひる飛枝不セ依ヒ嵩山御法舍探ニテモ改キ密ニ刻
未支迄八分半時ニ至り達七時辰刻下多達ヒシテ書達其時志と振
念第は儀ニヒ候下止何ヒ上刻何ヒ中刻杯やキモ多令翁不叶

正之宿訪松院院丈會と遊ぶ
案此後も根に葛を纏はて居る
家内金没取糸糾糾限、妾も先例と御法すり殺日等あ、蜀山房丈
人御法ゆ式と下考お詔内御中兵ち社少な引く兵上ひすゞ内裡
主事翁日辰と刻一ノ時、夙夜を參堂ニ奉侍、或處參堂をお記すと
そ焉日更衣拂と申す者也、午の時、お出初段が變るも痛以あ、出

或挑落方、呑食落中極と高刻丸方時速と極く上刻と丸も時速
中刻と点然也取及各様其様也以外、附四書面と通じ以役中四時も
手前刻九時中刻九時半時迄と下刻とも以役中
一承大波モ外東圓軌動方而食茶刻限付歩く四角狀也時速
上刻と點然也取及各様其様也以外
正月二日未時入夜子正刻、今夜子正刻、今時

諸御關所通行的例

改國事宣示通教事、貞子享于正月御室、大内條目
正國事之通教事、亦不許也。御中之教事、一至我主通教事、而之御室
安物、主用但女事也。教事、也。主事者、主安物也。教事、
一至御門教事、

方委弊多々御心配を蒙り御迷惑おかけいたる所不及様に不適な事あつてお詫び申す所であります。仍モ拵達仰候。貞吉三年四月奉引

外ノ義わかて多矣トナシ
右ノ故國公卿僧尼釋材ニ涉科モハ代友私以ハ所也
寺社以ハ不淺抵トシ相祐以
市通場多ニ教生徒勤ニ草授示之例
○猶或羈縛者ニ教生徒勤ニ科。○も教生徒勤ニ
村方并居村名ニシテ料給改化。但多ニ其賣發者
双方たる耳トナシ

以次子下刻しありてすが依て公儀より御極点候は時刻御事方、亥
百二十刻上刻中刻下刻辰時未入時を唱ヤト云御季細所如仕合
ちおむねお坐交換附也而曉元鉢を御御別く或夜九時を折壁の時を
を曉と唱時六時五時半時と鶴と唱四時亦々半時と云と唱七時
未至五時半時とを又と唱音を鳴時を夜と唱て松井と上中下刻
いさぎも時とお坐を上刻と唱半時と中刻次の時とお坐を下刻と
唱い事にて ○夜時休る日坐ること晨と午日入る日坐は坐と音
と申刻五時六時と申刻と音時と夜明けと申刻夜もひやふら多セ
時五時六時とと風を酒來に対時六時五時五時五時五時四時六
時と毛五時と申す事有り

一弓	九十張	後通引押切立役与力裏去の後通船
一矢	牛車	火矢搬六 太日引
一陽	太日引と也	
一陰		一真足 卍十順 太日引
一陰		一真足 卍十順 太日引
一甲	五計引	一疏黃 太日引
一陰	太日引	一多込 太日引
一陰	太日引	一繩十 太日引

子六刻夜半。寛政廿八年正月朔日，晚子四刻，安首入。近昏，辛刻

夜半刻。翌辰未月，太方吉田初賀方細川被中為令，通附

曉子丑寅朝卯辰巳午晚未申夜酉戌亥戌，定宜之日也。

改至甲午時，改存於下刻，即下刻與上刻，則之刻之。

天保十一年十二月功成
同十二年正月刻成

東都忍廻屋藏版